

青春時代(昭和42年)の映画から

『ことば』『色』の解説

白い椿が若い二人の運命を翻弄します・・・



映画『夕笛』のあらすじを紹介します。

昭和初期。ある城下町の“椿屋敷”と呼ばれる家に若菜（松原智恵子）という美しい娘がいた。若菜はある日、高校生の島村雄作（舟木一夫）が庭に咲く椿をもらいに来たことから彼と知りあった。“椿屋敷”は元は雄作の家だったが、漁師で成功した若菜の父、銀蔵（島田正吾）が買い取った屋敷である。その出逢いから若菜と雄作の間に愛が芽生え始める。

『夕笛』は芸術祭参加作品だった。歌い手が本業の舟木さんだが、日活は舟木さんを起用して芸術祭に挑んだのだからなんともうれしい。映画のロケ地は、彦根市 1967(昭和42)年9月公開 昭和42年度の芸術祭参加作品。

映画の場面



白い椿



別冊・近代映画 1967年10月号に掲載されたもので
白椿が暗示する不幸～白椿のある家には、不幸が起こるといふ言い伝え
「不幸を招く不吉な花、白椿」に、雄作と若菜を「悲運に翻弄される恋人たち」という展開に向かわせる狂言回しの役割を与えていることは、西河監督のカメラワークでも十分に示唆されていますし、脚本の中でも若菜の父・筒井銀蔵（島田正吾）の台詞で語らせています。いわば、不幸を招く白椿屋敷の住人となった雄作と若菜のふたりが、もやは逃れられない運命として、まさに、その白椿の花が咲き匂う中で出逢ってしまった…ということからこの悲恋物語は約束されていたということなのでしょう・・・

椿の花言葉について

ぶらっとサロン椿通信 令和3年5月号コラム を再録しています

椿は、イギリスでは赤い花は「謙遜な美德」、白い花は「至上の愛らしさ」を意味するとされ、「美德」、「確固・不変」「私はつねにあなたを愛します」など、椿の花言葉は、美德のシンボリックの意味合いが強くなっています。

赤い椿の花言葉・・・「控えめな素晴らしさ」「謙虚な美德」

白い椿の花言葉・・・「完璧な美しさ」「申し分のない魅力」「至上の愛らしさ」

ピンクの椿の花言葉・・・「控えめな美」「控えめな愛」「慎み深い」

実は椿の花言葉には、怖い意味もあるといわれています。

それは「罪を犯す女」という裏花言葉があるからです。フランスでは、椿は「贅沢な」「おしゃれな」という意味でとらえられ、椿が商売女にたとえられることがあります。・・・(以下ぶらっとサロン椿通信 令和3年5月号をご覧ください)

Green Snapコラムより引用しました

【#E1344C】-1rocone.com

紅色（べにいろ）とは、紅花の濃染による鮮やかな赤色のことです。または色料の三原色CMYのM100%『マゼンタ』を指す場合もあります。別に「くれない」や「こうしょく」とも読まれ、「こうしょく」の場合はもう少し赤みの強い色になります。

平安時代からの色名で、中国の呉から伝わった藍あいという意味の「呉藍くれのあい」から「紅くれない」と呼ばれるように。なお、この場合の藍とは『藍色』のことではなく「染料」を表しています。また、さらに唐から伝わったという意味で『唐紅（韓紅）からくれない』とも呼ばれていました。（「伝統の色いろは」より）



茜色（あかねいろ）とは、茜草の根で染めた暗い赤色のことです。夕暮れ時の空の形容などに良く用いられることで知られています。（「伝統の色いろは」より）

にお
鳩

意味
にお。かいつぶり。水鳥の一種。「鳩の海（琵琶(ビワ)湖)」水に入る鳥の意を表す字。（「漢字ベディア」より）